

## 庄司洋子先生の定年退職にあたって

庄司洋子先生は2007年3月に定年を迎えられ、立教大学社会学部を離れられました。先生は1990年4月に日本社会事業大学から立教大学社会学部に着任され、社会学部に所属されました。社会学部での在職年数は17年におよびました。先生はユニークな経歴をおもちで、それを活かした独自の研究領域を拓かれ、研究や教育で多大な貢献をされました。

先生のご専門は家族社会学を基礎に、社会問題、社会福祉、社会政策へとつながる方向と理論的はジェンダー研究へと発展したと言えましょう。そして、基礎の基礎に、大学卒業後約15年間東京都民政局に勤務された経験があるのではないかと思います。狭い意味でのアカデミズムに閉じない姿勢、常に現実を生きる人間の視点を失わない頑強さは、先生の学問の特徴です。厳しさと優しさを絶妙のバランスで表現できる先生の教育は学生たち、とりわけ、多くの女子学生にとって知識の習得だけでなく、生き方を考えさせるものでありました。

社会学部社会学科では家族社会学を中心に、当時の社会福祉系の科目を担当され、社会学を踏まえた社会福祉教育というひとつのモデルを作られました。人数的にはそれほどの数にはなりません、先生を迎えたのちの一時期、優秀な卒業生を送り出しました。2002年にコミュニティ福祉学部が新設され社会学科の社会福祉系科目群が移管されたのちは虐待、なかでもDV（ドメスティック・バイオレンス）の研究に着手され、国際比較調査を含めその成果を精力的に発表されています。

学部、学科の運営においても庄司先生は社会学科の学科長を務められ、学科運営の諸課題に対して熱意ある取り組みをされました。現在のスムーズな運営方式はそのころから始まりました。また、大学院で2度にわたり前期課程主任を務められ、多くの院生を研究教育の専門職へと指導されました。

全学的にも庄司先生は2000年4月から2004年3月まで全学共通カリキュラム運営センターの部長を務められました。第三代の部長として、全カリを安定期へと導きました。粘り強いコミュニケーション能力、強力な説得力、そして、それらを統合したリーダーシップと調整力なくしては全カリのその後の発展はなかったと言っても過言ではありません。

先生のこうした力量は社会学部の運営にも大変寄与するものでした。筋は通しながら最後は和を導くという先生のスタイルは困難な局面を学部が乗り切るうえでなくてはならないものでした。

庄司先生の活躍は学会やさまざまな審議会など非常に広範囲にわたります。先生は関連学会の役職を幾多経験され、代表的なものだけでも関東社会学会会長、福祉社会学会会長、日本社会学会理事などが挙げられます。この中には現在任期中のものもあります。一方、中央社会福祉審議会など中央省庁の審議会、委員会の委員も数多く歴任されています。先生が培われたネットワークの広さ、大きさに改めて驚く次第です。

定年退職というひとつの区切りはありますが、庄司先生は2007年4月より引き続き立教大学において21世紀社会デザイン研究科に特任教授として勤務を継続されています。

いつもエネルギーで疲れを感じさせない先生ですが、ご健康に留意され、ますますご活躍されることを祈ってやみません。

2008年3月

社会学部長

木下康仁